

『創部百年史』編纂の舞台裏

硬式野球部OB会事務局長

平本 光彦（昭和50年度卒）



私は2017年（平成29）より宇商硬式野球部OB会事務局の仕事に携わり、翌年には創部百年史編集委員長を拝命いたしました。百年史編纂は50年史や70年史が発刊されていなかったため文字通り「ゼロ」からのスタートとなりました。

また2020年2月に世界規模で新型コロナウイルスが拡大し、4月には非常事態宣言が発出され、オリンピックの延期、小中学校・高校の臨時休校、そして高校野球史上初の選抜大会と選手権大会中止という大変厳しい状況に陥りました。

OB会活動も厳しい社会情勢の中で予定されていた記念祝賀会が延期、Y校OBとの記念試合は中止という苦渋の決断を迫られました。

コロナ禍による自粛ムードの中、「正直、大変な仕事を引き受けてしまった」という気持ちと「県内のライバル校に負けない百年史を編纂しよう」という気持ちが交錯しながら、毎日のようにPCで原稿や写真を整理校正するという地道な作業を続けました。県立図書館も長期休館でマイクログフィルムや新聞記事から記録を探すことは大変でしたが、この期間により「OBの一人として与えられた使命を果たす」という覚悟ができました。

さて硬式野球部は1920年（大正9）に産声をあげ、創部3年目で関東大会初出場・初優勝。栃木県勢初となる第9回全国中等学校野球優勝大会への出場を果たしました。

その後、昭和・平成そして令和へと時代が移り変わる中で、市立商業学校（1902年創立の市商）と県立商業学校（1910年創立の県商）の2校の硬式野球部の歴史と伝統を連綿と引き継ぎ、1949年（昭和24）の統合後も県民に「宇商」の愛称で大いに親しまれていま

す。1963年（昭和38）、1979年（昭和54）、2013年（平成25）と3度の選抜甲子園大会に出場するなど栃木県の高校野球を牽引してきました。

現在、高校生の野球部員を取り巻く環境や意識は大きく変化していますが、人々に感動を与えるひたむきな宇商球児の姿は不易そのものであります。

私は高校時代にグラウンドで活躍することはできませんでしたが、卒業後40年以上経って、このような機会を与えていただいたことに感謝するとともに「創成期の記録、戦前の資料や写真から蘇ってくる先輩方の息吹を誰かに伝えたい」という思いで取り組んで来しました。

私が生まれる前の初代OB会長松島茂先輩（昭和25卒）からは市商と県商が統合された頃の苦労話や関東大会に出場し明大付属明治高校と対戦した話。旭中学校の先輩でもある佐藤彰男先輩（昭和31卒）や富田昇吾先輩（昭和32卒）からは宇都宮高校との日没再試合の話、育英や浪商の中軸を打っていた選手を押しつけて明大でメンバー入りした話。飯野晴一・磯部昌弘両先輩（昭35卒）の秋季・春季大会連覇と打倒宇工への秘策。そして菊地正八先輩（昭和38卒）からは捕手として選抜大会に出場しエース根岸繁男投手を支えた工

ピソード。金子と義先輩（昭和39卒）からは初めて甲子園の土を踏んだときの胸の高ぶりなどを聞いた取材活動は感動の連続でした。

当時「市商野球部の育ての親」と言われた清水保先生や統合宇商を率いた瀧巖先生のエピソードは、長年中学野球の指導をしてきた私にとって大変貴重なものになりました。

また先輩方と電話で連絡をし合ったり、後輩諸君とメール・LINEで連絡を取り合ったりした「新たな絆」は、私の大きな財産となりました。

現役の選手諸君には「みんなが戦っている今が、新しい歴史の1ページになる！」と伝えていきたいと思ひます。

「宇商硬式野球部百年史」は、SNSのように急速に拡散していくものではありません。地に足を付けて着実に浸透した結果が10年後、20年後「こんな百年史やDVDが編纂されていたのか！」という名門校として名声を高めていくものになるのではないかと思います。

結びになりますが、宇都宮商業高校の益々の発展と硬式野球部への深いご理解とご支援をいただけること、硬式野球部が栃木県の高校野球のさらなる牽引役になることを祈念いたしまして、寄稿とさせていただきます。